

座談会

手本なき社会を生きるための哲学

出席者 鷺田清一(大阪大学総長)
吉川左紀子(こころの未来研究センター長)
内田由紀子(同助教)



鷺田清一(わしだ・きよかず) 1949年京都市生まれ。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程修了。大阪大学大学院文学研究科教授等を経て、現在、大阪大学総長。専攻は哲学・倫理学。「臨床哲学」という哲学のありようを模索中。著書に『モードの迷宮』『(じぶん)―この不思議な存在』『顔の現象学』『悲鳴をあげる身体』『「聴く」ことの力』『まなざしの記憶』『〈弱さ〉のちから』『メルロ＝ポンティ』『「待つ」ということ』『京都の平熱』『わかりやすいはわかりにくい?』など多数。

教育学と心理学

吉川 もうずいぶん昔になりますが、学部生のとき、私は臨床心理学の勉強をしたくて文学部から教育学部に転部しました。ユング心理学の河合隼雄先生が臨床心理学概論の講義をされていたところです。せっかく教育学部にうつったんだから、と教育学の勉強を少ししてみたんですが、教えたり育てたりといった現実的なことにつなげるのはなかなか難しいという印象を持ちました。

鷺田 教育学って、ある意味で総合科学でしょう。その点、看護学と似ています。看護学も総合科学で、哲学も社会学も心理学も医学も使う。看護学は、横に医

学という強力なディシプリンがある。そうすると、一種の学問的なインフェリオリティー・コンプレックスから、反動で強力な科学主義に行くケースが多いんです。だから、看護学の論文はものすごく難しい。総合科学って、自分の方法がいったい何なのか、あるいは、自分の拠って立つ知見がいったい何なのかに自信がない。また、分岐しているぶん、よけいに理念や方法論を厳しく自分に課すというところがある。そのために、本当は柔らかい学問のはずなのにがちがちになる。教育学もそういうところがあるのではないかと思うんです。数学、哲学、生物学、物理学などは学問がかちっとしていでしょう。何しろギリシャ時代からの歴史があるんだから。骨格は揺るがないし、1人ぐらいへなへなしたのがいたってびくともしない。だから、逆



吉川左紀子



内田由紀子

に反抗したり、あるいは、「俺はそなんん知らん」といつて寄り道したりすることが許されるんです。

僕は30代でファッション論をやって、ファッション雑誌に書いたりした。そうしたら、そのころはもう卒業していましたが、研究室の主任の先生が「世も末だ」とおっしゃった。「先生、そんなに服を軽蔑するんやったら、裸で生きたらどうですか」と、口では言わなかったけれども心で思って、それで飛び出した。でも、哲学への信頼は全然失っていない。だから、自前でやれる。そういうかたい環境は、逆にゆるい位置を取りやすいんですよ。

吉川 学生時代というのは、外の枠組みとかそういうものに反発して育っていきますよね。1980年ごろ、私が専門に選んだ認知心理学は、単語とか文字とかを使った研究が多かった。そこで私は「顔の記憶」の研究をしました。それがすごく面白かったですね。

鷺田 顔は面白いでしょうね。

吉川 先生のファッションほどじゃないかもしれませんが、研究会で会った先生から、「早くまともな研究をやりなさい」と叱られました。私はへそ曲がりなので、そんなふうに言われるとかえって、絶対やめないぞと思っていましたけど(笑)。ただ、心理学は物理学のようにかっちりした方法論があるわけではなくて、実験やデータ分析を使う実証科学の方法論と、臨床心理のような事例研究の方法論という2つが、ずっと、お互いに水と油の関係で平行線のまま進んできたという感じがします。でもこれからは少しずつ、つながりができていくんじゃないかという気がしています。

鷺田 河合隼雄先生は学問性の根拠ということにずっと取り組んでおられました。科学は普遍でないといけません。この方法を使って、こういう前提で出発したら、必ず結論はこうなる、というのが科学ですが、1人にしか当てはまらないことを科学と呼べるのかという問題です。

吉川 臨床心理学は、クライアントとカウンセラーの

やりとりを研究者の主観を頼りに解釈していきますよね。私は自分の主観と解釈に自信がなくて、結局、臨床心理学は選ばずに、実証研究の方法で心の研究をしようと考えました。それで、臨床心理学関係の本はほとんど読まなくなってしまったのですが、最近になって、センターのプロジェクトとの関係で、もう一度臨床心理学を勉強し直しています。そうすると、これがまた面白い。実証研究につないでいけそうなアイデアもいろいろ見つかるんです。

専門外の人には無味乾燥に見える実験心理学の論文でも、読んでいて胸がときどきするほど感動することがありますしね。結局は、方法論の問題ではないんでしょうね。人のこころの普遍に近いものというか、そこに触れるような研究には力があります。だから動かされるんだろうと思います。

鷺田 河合先生は、「ムーブ」という言葉をよく使われました。相手にどんなムーブを起こさせるか。それはカウンセリングの現場の話なんですけど、学問についても言えるんじゃないでしょうか。ゾクッと来るものは来るんです(笑)。

吉川 うちのセンターのおもしろさは、曖昧模糊とした「こころ」を研究しているところにあると最初は思っていたんですが、このごろは、ちょっと見方が変わってきました。むしろ研究方法が何でもあり、というところがユニークなのではないかと。だいたい、研究者は自分の使う方法にはこだわりがあって、使っている



河合隼雄(1928~2007) 日本を代表する臨床心理学者の一人であり、日本文化を縦横に論じた。元文化庁長官。京都大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授。文化功労者。

研究方法が違う研究者どうしはあまり近寄らないし、仲もよくないのがふつうです（笑）。その点、こころの未来研究センターは、神経生理学から心理学、宗教学、民俗学まで全然違う方法を使う研究者が、連携しながらこころに迫ろうという場なので、これはなかなか他にはないだろうなあ、と。かなり大胆不敵ですね。研究テーマは曖昧ですし、研究方法はいろいろですし（笑）。

手本がなくなった社会

内田 私の専門は文化心理学で、とくに日本とアメリカの比較をしております。鷺田先生の『「待つ」ということ』（角川選書）とか『〈弱さ〉のちから』（講談社）などのご本を読ませていただいたときに、私なりに現代社会の日本人のこころの問題について、キーワードを拾ってみたくです。1つは、「待つ」ということ。現代の人は「待つ」ということがだんだんできなくなっているのではないかということを書いておられた。それは要するに、不確実性をどう享受するかという問題だろうと思いました。

もう1つ、先生は、希望を書き換えるというメッセージを発信されていた。それも、自分が新しいもの、不確実なものに対して、可塑性をいかに持つかということだと思うのです。さらに、「他者の中の他者になる」、それもすごく難しいと思います。

私はいまニートやひきこもりの問題を研究していますが、個人としても、社会としても、不確実性に対する不安に対してキャパシティがなくなっているのではないかと思います。

現代社会の若者は、どうやったら不確実な未来を受け入れていくことができるのか。そのことについて考えるヒントがあれば教えていただきたいのです。

鷺田 非常に大きな問題ですね。

吉川 若い人たちが、こういう大人になったらいい、あるいは、こういう人を目標にしようという、身近なモデルとかお手本が見つげにくい社会になってしまったことも、未来に向かう姿勢があやふやになっている原因ではないかと感じます。

いま内田さんが言ったようなこと、若い人が自分のもっていた希望を別の希望に書き換えるというときにも、何を手がかりに考えたらいいのかがよく分からない。指針になるものがない。大学院生を見ている、かつては研究者になりたいければ、おおよそこういうふうな道筋で経験を積みばいいという漠然としたモデルがありました。今はそのあたりが見えにくくなっているように思います。

たぶんそれは若い人だけの問題ではなくて、中高年の世代も同じようなものでしょうね。生き方、年のとり方のちゃんとしたモデルがあるかということ、そうでもない。それで、『坂の上の雲』じゃないですけども、明治時代には日本人も夢を持って生きていた、みたいな、失われてしまった過去のイメージの中の「理想的」日本人のあり方に注目が集まっている。

昔は、お手本は必ずしも「尊敬する人物」のように堅苦しいものだけじゃなくて、身のまわりにいる年長の兄弟とか、近所にいるおじさん、おばさんたちの中にも、こんな感じで自分も生きていくんだなと思うような手がかりがあったような気がするんです。いまはどの社会にも、大学の中にも、そういう見本やお手本が見つげにくくなっています。

鷺田 高度消費社会はものすごく流動性が高い社会だから、最終的にはそうならざるを得ないですね。かつてのお手本になる人は、政治家や経済人のみならず、学者、職人、漁師さんでも、その人がやったことは狭いかもしれないが、独特のたたずまいがあり、何か圧倒されるような確かなものがあったと思うんです。

お手本があるときは、同時にあこがれがある。そもそも学びは「真似び」で、「真似」をすることから始まっているわけです。いまの社会は、他者を真似るのは個性がないということで評価が低くなっている。でも、あんなふうになりたいというあこがれをもつからこそ、人はきつい仕事にも耐えられるんだと思います。

「人生全部見えちゃっている」

鷺田 10年以上前のことですが、高校生ぐらいの若い人が、人生もう何もかも見えちゃっていると言っていました。要するに、あこがれの対象がないということです。何歳で就職して、何歳で結婚して、何歳で課長になり、何歳で定年になって、退職金がどれぐらいで、年金はどう、そして何歳ぐらいで死ぬ、と。自分たちがこれからやろうとしている仕事に就いたとき、人生がどうなるかがみんな見えちゃっていると言っていました。

最初は、「高校生でそんな思いでいるのか。大変やなあ」と同情しましたが、よく考えたら、実はものすごく都合のいい話とちがうかと言いたくなってきてね。だいたい、全部見えちゃっているというだけけれども、いいことだけを勘定しているんです。自分の思いとは関係なしに、大げがをしたり、病気になるかもしれないし、親や妻、夫に先立たれるかもしれない。それは全然計算に入れてない。

そこで、さっきの内田さんの話に戻って、若い人

は、このさき何が起るかわからないとは考えていないのだから、それが起こったときにはどうしていいかわからなくて呆然とするのです。

吉川先生がおっしゃったように、それは、吉川先生の世代にも、あるいは、われわれの世代にも言える。つまり、戦争に行ったことのない世代は、ある意味で、みんなそういうところがあるんじゃないでしょうか。

子どもも、思いと違うことがあったら、どうしたらいいかわからなくておろ

ろ不安定になるだけけれども、親だってそうでしょう。子どもというのは、こんな性格の子になってほしいなと思っててもそうならないし、全然勉強してくれない、付き合ってほしいなと思う子とは付き合わず、付き合ってほしくないと思う子とばかり仲良くなる。でも、本来、親は子どもが思いどおりにならないことを喜ばないといけないのです。それほど自分を持っているということですからね。

昔の親はそういうことをよく知っていた。「いまのままやっていたら、いつか痛目に遭うかもしれない。でも、それは自分で気づくはずだから、それまでちょっと待っていてやるしかないか」というふうに、「待つ」ということができていたと思うんです。

あるいは、親が子どもの軌道修正をしなくても、まわりに町内の人とか、おじさん、おばさんがいて、「それはあかんで」とよその子にも口出しする。言われたときは「ぎゃふん」となるけれども、それほどどうとなくない。それに、たとえば毎日八百屋さんの前を通っていると、「あの子、このごろちょっと様子がおかしいで。何かあったんちゃうか」と、夫婦でしゃべったりするわけです。そういう、本当は見ているんだけど、見ないふりをしているような人がまわりにいた。その人たちの中には口やかましく言う人もいれば、ぼんと上手に言ってくれる人もいる。みんな子どもに少しずつ触れながら、その子の形をつくっていったところがあるんです。

でも、いまはそういう地域とか中間世界はほとんど壊滅状態にあります。だって、見て見ぬふりをするグレーゾーンというのは、ふだん少し離れたところから見ているからできるんです。町内や商店街だったら自



子育ては24時間要介護

然にできることだけれども、マンションでは見るか見ないか、どっちかしかない。エレベーターで会うだけですから。

子育ては24時間要介護

内田 私は10月に出産したばかりで、この間、復帰したところです。今、夫が育児休暇を取っています。たとえば、その育休にしても、2人同時には取れない仕組みになっています。核家族の場合、基本的には1人で子育てをするということになります。すると、まわりから情報が入らなくて必死になる。子どもが泣いたときに、まわりの人が、「そんなん、放っておいても大丈夫」とか言ってくれたらほっとするけれども、自分だけの責任で何とかしないとイケない。不安な要素があっけはいけないから、みんなマニュアルを一生懸命勉強するようになります。もう本当に自分がしっかりしなければどうしようもないという感覚を持ちながら、人を育てていくという感じですね。

鷺田 まったくそのとおりだと思う。さっき言ったように、いつかわかるだろうと置いて放置するやり方、それから、母親1人でやらないでも、あんまり無茶をしたらだれかまわりの人が注意してくれるとか、そういう余裕があったのが、いまは夫は会社へ行っているし、父母は遠いし、近所は関係ないしで、1人の女性が、わが子とは言え、24時間1人の他の人間の面倒をみている。そんなのは不可能なことですよ。

ご飯を食べさせ、動くのも手伝ってやり、寝つくまで寝かせてやる。それはもう、お年寄り以上の24時間要介護です。お年寄りの介護問題については、要

介護者も介護をする側も、女性1人にそんなことをやらせるのは無理だということで、お互いに助け合ってケアをしよう、あるいは施設の機能を充実させて、社会的にお年寄りをお世話しようという流れがあり、制度化もだいぶされてきました。ところが、子育ては、そんなの1人では無理だ、みんなですてましようという環境とか仕組み、制度化は、老人介護の場合と比べたら全然なされていませんね。

内田 ほかに人に「助けてほしい」とはなかなか言い出せません。

鷺田 母親失格みたいに言われる。

内田 それで精神的に追い込まれる人がたくさんいるんじゃないでしょうか。

鷺田 高齢者介護と同じぐらい、子育て介護の仕組みをつくっていかないとけない。子育てであれ、これしかないということはないはずなんです。それは、ちょっと目を開いただけでわかる。たとえば、子育ての文化史とか人類学の本を読んだら、「こんな子どもの育て方をしている社会があるのか」と知るし、歴史の勉強をしたら、「昔はこんなんやって育ててたん？母親って楽やったなあ」と思う。だって、昔は自営業が多いし共稼ぎ率が高い。それで、おいじちゃん、おばあちゃんに任せる。

歴史を勉強したら、そういう別の可能性が見えてくるはずなんだけれども、いまは、学校で歴史をちゃんと教えないのも問題ですね。

里山のように豊かな場所

吉川 うちのセンターで行っている発達療育の研究プロジェクトでは、発達障害のある小学生の子どもさんたちの読み書きの力をe-Learningを使って身につける療育活動をしています。1週間に1度、お母さんと一緒にセンターに来て、パソコンで読み書きの練習をする。ボランティアの学生が院生と一緒に子どもの横についてサポートしているので、その間、お母さんはソファに座って本を読んだり、ぼーっとしたりしてくつろいでいます。その様子を見ていると、このプロジェクトは、子どもにとって意味があるのと同じように、親にとっても意味があるんじゃないかと感じます。自分の子どもの様子を、家庭にいるのとはちょっと違っ



里山 適度に目をかけたり手入れをすると稲や野菜や果物が具合よく育つ（撮影：赤阪友昭）

た距離から眺められる。

学校では、ほかの子と同じように読んだり書いたりできないと、先生に怒られたり友達に馬鹿にされたりして、あんまり楽しくないことも多い。読み書きに限らず、知的な活動一般に対して、少しでも遅れていると学校ではネガティブなフィードバックを受けやすいですね。センターの療育では正解するとまわりにいる学生も褒めたり喜んだりしてくれる。なので、子どもたちは喜んでやって来ますし、お母さんもここにいる間が、息抜きの時間になっているように思います。鷺田 脳の器質的な障害は、プロのお医者さんがきっちり研究し、治療を施してほしい。ケアする者にできることはそういうことじゃなくて、「気を散らす」ことだと思えます。つまり、その子にかかわる人が、いつのまにかすつと入れ替わったりする。場面が少し変わるだけで、振る舞いとか感情って変わってしまう。人間が密室で1対1で長時間いっしょにいたら、どんな偉い人格者でもおかしくなりますよ。

親しい介護士の人に教えてもらったんですが、「この施設がいいかどうかは、10分ぐらいいたらわかります」と言います。何かというと、大きい声がするかしらないかと。「何々さん、こっち行って」とか、大声で指示をしているような施設には、いいところは絶対ない。全員が自分の役目を果たしながら、当たり前のようにまわりを見ていて、「ああ、あそこ、ちょっと助けたらなあかな」と思った人はすつと動く。いい施設だと、たとえば看護師さんとアルツハイマーの人の関係が煮詰まっているが逃げられないようなときに、それに気づいたほかの要介護者の人がさりげなく車椅子で横を通ったりする。「今日は暖かくなったねえ」とふつと会話に入るだけで、煮詰まったものがふ

わーっと溶けていく。

内田 それは自然で健康的な感じがしますね。

鷺田 いい施設ではそれが自然に起こる。つまり、要介護者の人自身も、密室に閉じ込められているんじゃないで、車椅子で自由に動けるような空気が普段からできていると、そういう意図しないケアがよく起こる。だから、いい施設は大声がしないと書いていました。吉川 その介護施設の場にいる人たち全体で、ひとりひとりのお年寄りを、何とはなしに目にかけている、というのがいいですね。うちのセンターは「里山モデル」がいい、という話を設立のころにしていました。里山では、適度に目をかけたり手入れをすると、稲や野菜や果物が具合よく育つ。手を入れすぎてもうまくいかなしいし、ほったらかしでもだめです。人の集まる場所でも、適度に気遣いのある場ができるといい。

鷺田 それで、お米も果物もよく育つんでしょ。人間の場合も、「子育て」とか「教育」ってあまり言わないほうがいい。「育てる」と他動詞で語らないほうがいい。学校でも地域社会でも、そこにいたら、子どもが勝手に育つような場をつくるのが教育の本当の目的です。だから、里山といっしょです。

パスカルの「気散らし」

鷺田 さっきの気を散らすことですが、パスカルに「気散らし」という言葉があります。邦訳本では「気晴らし」と訳しています。パスカルは、人間が一生懸命やっていることは、みんな「気散らし」だと言っています。何から気を散らしているのかというと、自分とは何かとか、何のためにここにいるのかとか、そんな問いで、それを考えだしたら、悩んで、えらいことになる。だから、そういう大事だけと答えのない、怖い問いに触れないで済むように、夢中になるものが人には必要だ。それが、学問かもしれないし、仕事、ボランティア、ジャンルかもしれない。そんなふうになっています。

内田 それを与えてくれるのが、社会とか関係性ですね。そこから心を閉ざしてしまったら、散らせないでひたすら自分と向き合ってしまう。

鷺田 だから、「気散らし」というのは、育児とか介護をされている方の特別な問題ではなくて、実は僕ら自身が気を散らすことでかろうじて破裂しないで済むようにしているということだと思います。母と子にしても、介護する人とされる人にしても、関係が煮詰まってくると余裕がなくなってくる。

内田 社会の中での「契約」という概念が先走っているんじゃないかという感じがします。ある関係性をつくるときに、まわりにいる緩い関係の人が、ちょっ



パスカル(1623~1662) フランスの思想家、数学者、物理学者。著書『パンセ』の中の「人間は考える葦である」という言葉は有名。

と口を出したり手を出したりすることに対して、非常に過敏になる。それをやったら相手の権利を侵害するんじゃないとか。そういう細かい契約関係みたいなことに縛られてしまうと、ぎくしゃくして行動もしづらしいし、組織がうまく回らなくなるという感じがあります。

吉川 言葉にしないほうがうまくいくことを無理やり言葉にしてルールにして、みんなでしっかり守りましょう、というきちきちした風潮が強くなっている感じがしますね。何かをもらったときのお返しでも、最近ではもらったらすぐに返そうとする傾向がある。自分がまわりから何かしてもらうことに対して、ものすごく負担に思うんですね。昔は自分が返せるときに返したらいいわ、ぐらいの緩いやり取りだったのに。

鷺田 メールだってそうですね。

吉川 日本はどうしてこんなに窮屈な社会になってきたのか、と思いますね。待てないこともそうだし、契約でやり取りをすることもそうだし、個人情報の保護にはものすごく神経を使うけれども、情報公開もどんどんしなければいけない。よかれと思ってつくったルールで、かえってストレスがたまることが多いように思います。

他人との接触に敏感な都市社会

鷺田 たぶん、それには2つ理由があると思うんです。1つは、都市社会というのが、人々を原子化しているところがある。これは1人1人が共同体のしがらみのようなものから自由になることです。しかし、それは他方で根無し草になるということでもあって、拠って立つ場所を自分の中にしか求めないから、不安

になりますよね。1人1人が、私にはどんな素質があるんだろうか、どんな才能があるのか、それがなかったらどうしようと必死で探そうとする。そういう神経症的な自己意識になる。

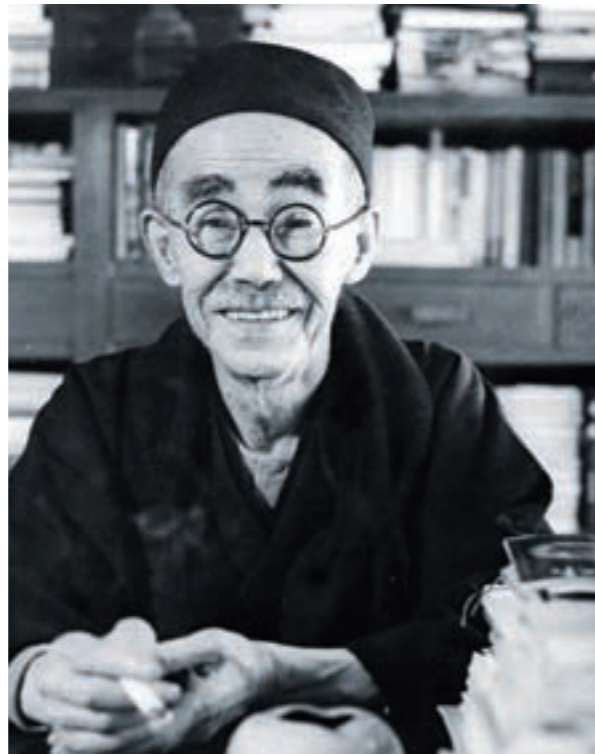
もう1つは、吉川先生がおっしゃったように、自分と他人のプライベートな領域が交わることに對して過敏になってしまふ。それは、先ほども言いましたが、都市というのは、出自も育ちも教育も違う人が、たまたまマンションの隣どうしに住むでしょう。子どものときから出入りさせてもらっているお隣さんがあって、そのまわりに町内の人がいて、その外に他人ばかりの世界があるというグラデーションもなくて、いきなり隣は赤の他人という関係ですね。

昭和のはじめに、民俗学者の柳田國男が、われわれの社会の一番大きな問題は、貧困が孤立しだしたことだといったんです。それを彼は「孤立貧」と呼びました。明治のころはみんなはるかに貧しかったのに、貧しさということをあまり感じないでゆったりと生きていた。それは、「共同防貧」、共同で貧困を防御していたからです。たとえば、お父さんが病気で亡くなって母子家庭になっても、みんなが貧しくて、だれが苦しくなるかわからないから、みんなで助ける仕組みがあった。われわれの一番の問題は、「孤立貧」の時代を迎えていることだということです。

現代は貧困の代わりに、困窮ということ自体が孤立していて、「孤立困」となっています。

それではいかんと思って、みんながもう一度重なり合い、他者の領域にある程度入っていないとお互いもたないというところでコミットしだしたのが、阪神淡路大震災が起った1995年のボランティアからです。いまは、地域のいろんなところで、地域の再生をやっている活動などがそうだと思うんです。

ただ、僕がそのときにいつも言うのは、ほんの20～30年前は、みんな、地域から出ていきたがった。ここが嫌で嫌でたまらなかつた。それがなぜいま必要なのか。そこをよよく考えてやってほしい。また、「地域」といったら何かいいことみたいなイデオロギーになっているから気をつけてねと。「エコ」にしても、いまはだれも反対できない。「本当にそう？」と疑問がどこかにあっても、大きい声で言ったら、うわーっと集中攻撃がくる。エコ、地域、コミュニティ、アート、コンプライアンスのように反対できないものがすごく増えている。だれも正面切って反対できない思想というのがイデオロギーの定義だとすると、いまこそイデオロギーの時代になったと思う。なぜコミュニティなのか、なぜ地域再生なのか、なぜそれがいま必要になっているのか、そういう事情や構造をきっち



柳田國男(1875～1962) 日本の民俗学を開拓し、確立。『遠野物語』『桃太郎の誕生』『海上の道』など多くの業績を残した。

り言わないと、ただエコ、コミュニティ、アート万歳なんて言うのは、やっぱりあぶないんです。

自分は変わりうる者

驚田 教養教育が大事だとよく言いますが、教養って、自分たちの社会で、もう覚えていない過去のことを勉強することと、自分がまだ行ったことのない地方、あるいは別の国の文化を勉強することでしょう。要するに、自分がいま見ているこの世界を、距離感をもって外側の目でも見られるようになることですね。

内田 でも、それがすごく不安だという人がいるんです。

驚田 えっ、どうして？

内田 私は比較文化研究の話をよく授業でしています。たとえば、日本だと、親子が川の字で寝るが、アメリカだと、生まれたときから違う部屋で寝ますよとか、そういう話をして、人間は相対的な価値観の中で定位しているものなんだよという話をします。学生からの感想コメントには当たり前だと思っていた価値観が当たり前ではないことに気づくことができよかつたという意見が多いのですが、逆に、自分というものがまわりの歴史的な流れとか空間によってつくられているという感覚に対して、怖くしょうがないという感想も毎年あります。自分がある流れの中で定義されることを認めるのが怖い。

驚田 ほかのあり方もOKだということを知ってしまったら、自分の根拠が揺らぐ。私の確信を壊すんだったら、先生、どうしたらいいのか教えてくれ、責任を取ってくれと。

内田 そうなんです。

驚田 それは、あなたも言われたでしょうし、僕らの世代はとくに言われたんですが、たとえば、男・女であるということも、社会的に構成されているという考え方があります。僕らの若いころは、それが大はやりしました。だから、パラダイム自体を変えないといけなとか、これはこうしかあり得ない必然だと思っているものも、実は歴史的に制度化されたものに過ぎない。性格だって、服だって、みんな制度だということを書いてきた世代です。しかし、そう言われても、じゃ、代わりにどうしたらいいかを言わずにつぶすばかりだったら、最初から目を覚まさないでおいてくれと言いたくなる気持ちはよくわかる。

内田 そういうときに、どう答えるべきか、いつも悩むんです。

驚田 どう答えますか。

内田 難しいんですが、1つは、そういう自分を受け止めることだと私は思ったんです。たとえば、アメリカに留学したときの自分と、日本にいるときの自分が、スイッチを切り替えるように変化すると感じたことがあったんです。留学先では、英語で考え、アメリカの文化に溶け込もうとしてやってきた。そして、日本に一時帰国するときには、なるべく飛行機の中で日本の小説を読んで帰るようにしていました。日本の小説は目を縦に走らせる。アメリカでも、日本のニュースはネットでいくらでも見ることができんですが、ネットって横ですよ。そこで、日本からたくさん本を送ってもらって、とくに帰国するときの飛行機の中で読むようにしました。

日本に帰ってしばらくすると、それまでアメリカ式に考えていたことを忘れてしまいます。それで、またアメリカに戻るときには、今度は横書きの英語の本を読んで切り替えることに努めたという経験があります。1人の人間がいろいろな場とか状況に応じることが可能なんだということを感じました。

「では、どれがあなたですか」と言われたときに、そうやって変わりうる自分すべてが私なのだし、そこにはきちんと連続性もあるといえると思いました。状況に順応し、自分は変わりうる者であるという感覚を持つことは、決して怖いことではない。制度や文化がそこを規定するというよりは、むしろそこに沿っていくことに主体性を見いだすようなところの機能がちゃんと備わっているのではないかと思ったのです。

遊園地ではなく原っぱで

驚田 僕だったらどう言うかな。3つぐらい考えられる。1つは、「外から見るほうがええことがあるぞ」と言う。あなただって、ずっとお母さんのおなかの中にいるより、外に出てきて自由になって、親から離れていろんな人と付き合っただけ楽しかったらう。それまでは臍の緒で楽に栄養をもらっていたのに、外に出たら自分で息をして物を食べないといけない。それほど変化するんだけど、それでも出てきたほうがよかつたらうって。そう言っても、あんまり通じないでしょうが。

その次に思うのは、外国に行かせることですね。べつに外国でなくても、文化のちがう所ならどこでもいい。行く前は「付き合いの仕方も違うし、全然言葉も通じないし」とぶつぶつ言っている、行ってしまつたら何とかなる。最低3カ月ぐらい1人で放っぼり出すと、帰ってきたらえらい元気になっている。

このごろ大学で流行っているのは、インターンシップです。小学校だったら体験学習。でも、至れり尽くせりのインターンシップではなくて、「一番いいインターンシップは、上手に失敗させるインターンシップです」と玄田有史さん(東京大学社会科学研究所教授)は言いました。思っていたことが全然通じなかつたといったことを体験しても、それで「ぎゃふん」となるのではなしに、「どうしたらえんやろう」と考える。「『現場経験』なんてきれいな言葉で言っているはいけません」とも彼は言っています。

僕流の言い方では、「遊園地に行つてはいけません。原っぱでやらない」ということです。青木淳という建築家は、いまの建築ってみんな遊園地だと言っています。家を造るとき、ここは応接間、ここはトイレ、ここはキッチン、というふうに決まっている。自分はそこへ行って何をやるかが決まっている遊園地みたいな空間はつくりたくないの、で、「原っぱをつくる」と言ったんです。

僕はそれを読んだときに、インターンシップってまさにそうじゃないかと思った。遊園地のように、まずジェットコースターに乗りましょう。次はこのグルグル回転するのをしましょう、とそれなりにヒヤッしたり、ブルブルする経験ができるようになっている。でも、それで終わり。

原っぱというのは、ベンベン草が生えているところでもいいんです。何も遊具がない。何をしたいのかわからない空間。そういうところにいると、知らないやつが来る。しゃべり方もわからないときに、たとえば



大阪の街中で開かれている哲学カフェ
京阪電車なにわ橋駅「アートエリアB1」にて開催するラボカフェ「中之島哲学コレージュ 哲学カフェ『家に帰る、とは?』」

だから、研究しているだけではいけないというのが僕らの考えです。

それで、町に出て、哲学カフェを喫茶店でやったり、教室でも300回以上してきました。そのときのルールは、とにかくみんなに考えてもらうということ。絶対に人の引用をしないこと。自分の言葉でしゃべってくださいと。僕はプロの技を捨てる。一切誘導しない。あるいは「哲学ではこう考えます」と言わないで、司会をするだけなんです。そうしたら、たいていの人は、面白かったと言っていますが、クレームもあった。

それも当事者から。

内田 当事者からですか。

鷲田 最初のうちはね。だって、哲学で考えたときに結論は出っこない。生きることの意味とか、家族とは何かとか、答えが出ないようなことをテーマにやっているから。そうすると、たとえば、看護師さんなんかがおっしゃるのは、「私たちは会議とかディスカッションは、何かの方針を決めるため、あるいは、次への申し送りとかをするためにやっていて、結論のない会議はしたことがないんです。私たちはここで3時間しゃべって、この時間は何だったんでしょうか」というわけです。とにかく答えが欲しい。でも、楽しかったという人もいます。それでいいんですけどね。

次は学会からの批判です。それが本当に学問と言えるのか。そんなことを大学院生にさせて何になるんだと。そこで、また戦いをやるのです。僕は、学会で初めて共同発表をしました。哲学の学会発表って、1人でしかないものなんです。自分でテキスト分析をやる。しかし、僕らのチーム3組で、哲学の院生と看護師さんが共同でやったし、僕は同僚と共同発表をやりました。

それはものすごく知恵がいるんですよ。でも、それをしないと現状は変えられない。

吉川 本当にそうですね。新しいことをする勇気と意思が大切ですね。

今日は、鷲田先生から、今の社会の難しい状況を切り開いてゆくにはどうしたらいいか、手がかりになるお話をたくさん聞かせていただきました。どうもありがとうございました。

内田 本当にありがとうございました。

(2010年1月10日、こころの未来研究センターにて。座談会撮影:坂井保夫)

ポーンと空き缶を蹴る。向こうのほうも手持ち無沙汰ですから、ポーンと蹴り返す。そんな中で、2人でやるサッカーもどきが始まる。そうして、自分らでルールをつくり、遊びをつくっていく。

そういう形で2人が結びついて、翌日は友達も連れてきてというようになっていくと、青木さんの言い方だったら、そこで何をするかによってその空間の意味が決まってくる。あらかじめそこですることが決まっている空間じゃなくて、人が寄ってきて、みんなで何か行動をつなげている間に、そのルールが生まれ、その空間に意味が生まれてくる。インターンシップというのは、そういうものなんだということなんです。吉川 遊園地でなく原っぱをつくることの大切さ、よく分かります。それを実際にやるのは本当に大変でしょうね。原っぱ方式のインターンシップでいきましょう、と企画者や参加者が考えて楽しくやっていますが、最近では第三者というか、当事者でない人たちに対しても、やっていることを説明して納得してもらわないといけなかったりしますから……。

生き方を支える哲学

鷲田 それは、戦いなんです。僕らが哲学カフェをやったときに、どれだけ学会から冷ややかな目で見られたか。僕らは、哲学というのは対話だという考え方をしています。書物とでも対話しているんだから。ソクラテスなんて、本を1冊も書いていないでしょう。哲学というのは、難しい言葉でやるものじゃない。日本は翻訳語でやっているから難しくなる。ヨーロッパの人は、子どもでも知っている簡単な言葉で哲学をやっているんです。ただ、それを緻密にやっているから難しいだけです。いまの哲学は研究の対象になっている。でも、哲学って、人の生き方を支えるものなん

センターの動向(2009.10～2010.3)

●2009年10月、人事異動がありました。専門職員に松永裕之さん(～2010.3.31)、オフィシアシスタントに奥井遼さん、小木曾由佳さん、坪井翔さんが着任しました。

●10月6日、第1回注意研究会を開催しました(於:京都大学大学院人間・環境学研究科棟地下講義室)。話題提供:稲場直子先生(京都大学大学院医学研究科認知行動脳科学講座研究員)、タイトル:外界の動きの検出・知覚に関与する脳内メカニズム。

●10月15日、河合俊雄教授の著作が出版されました。中沢新一・河合俊雄編『思想家河合隼雄』岩波書店。

●10月17日、カール・ベッカー教授の著作が出版されました。カール・ベッカー、弓山達也編著『いのち、教育、スピリチュアリティ』大正大学出版会。

●10月18日、こころ学ブログに新しい記事を掲載しました。「施しだったらごめんだぜ」田村亮氏。

●10月22日、鎌田東二教授の著作が出版されました。『超訳 古事記』ミシマ社。

●10月23日、2009年度こころの科学特別レクチャー(2)を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。講師:北澤茂先生(順天堂大学医学研究科)、演題:自閉症治療に挑む心理学と脳科学。

●10月25日、第5回こころの広場(京都府との連携事業)を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。タイトルは「イマドキの思春期～昔と変わったこと、変わらないこと～」第一部は岩宮恵子先生(島根大学教育学研究科教授・臨床心理学)「イマドキの思春期～昔と変わったこと、変わらないこと～」第二部は質疑応答で、司会進行は河合俊雄教授。

●10月25日、畑中千紘研究員の執筆

した記事が掲載されました。「ドラえもんにみる発達障害の心理療法」『こころの科学』148(2009年11月号)日本評論社。

●10月28日、第4回食育研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階小会議室2)。プログラムは、1.川村協平先生(山梨大学教育人間科学部)「キャンプ生活における子どもの食体験」、2.Vinai Norasakkunkit先生(ミネソタ州立大学心理学部)「The cultural psychology of individual choice versus social harmony:Consequences for the development of eating habits and food preferences.」、3.個別研究の進捗状況に関する報告と討議。

●10月28日、第2回注意研究会を開催しました(於:京都大学大学院人間・環境学研究科棟地下講義室)。話題提供:坂田吾吾先生(広島大学大学院総合科学研究科行動科学講座教授)、タイトル:時間弁別行動と海馬θ波。

●2009年11月、人事異動がありました。研究支援推進員に矢野裕理さん(～2010.3.31、2010.4.1より教務補佐員)、駒田安紀さん(～2010.3.31、2010.4.1よりオフィシアシスタント)が着任しました。

●11月4日、第3回注意研究会を開催しました(於:京都大学大学院人間・環境学研究科棟地下講義室)。話題提供:辻本悟史先生(神戸大学大学院人間発達環境学研究科健康発達論コース准教授)、タイトル:過去と未来をつなぐ——動的行動制御における前頭連合野の神経機構。

●11月10日、第5回食育研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3F大会議室)。タイトルは「人を含む霊長類の採食行動の進化と発達」(パリ自然史博物館の最新の成果から)で、Annette HLADIK (Honorary Attachee at the

Museum of Natural History, Paris), Claude Marcel HLADIK (Emeritus Research Director at the Museum of Natural History, Paris), Laurent TARNAUD (Research associate at the Museum of Natural History, Paris)各先生が発表し、ディスカッションが行われました。

●11月23日、京都府/京都大学こころの未来研究センター共同企画シンポジウム「遠野物語と古典 物語の発生する場所とところ」を開催しました(於:芝蘭会館稲盛ホール)。基調講演は山折哲雄先生(宗教学者・元国際日本文化研究センター所長)による『遠野物語』と『源氏物語』の距離、第一部は石井正己先生(東京学芸大学教授・遠野物語研究所研究主幹)「遠野物語の場所とところ」、山本淳子先生(京都学園大学教授・源氏物語研究)「源氏物語の場所とところ」、上野誠先生(奈良大学教授・万葉古代学研究所副所長)「歌と物語の発生」、第二部は川村邦光先生(大阪大学教授・宗教学)「東北おぼあたちの物語の発声現場」、河合俊雄教授「遠野物語における場所とところの接点」の発表、その後、山折哲雄先生の総括コメントと高柳俊郎先生(遠野物語研究所所長)の挨拶がありました。趣旨説明・司会は鎌田東二教授。

●11月25日、William Newsome先生を囲んでのワークショップと第4回注意研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。1.William T. Newsome, Ph.D. (Professor, Department of Neurobiology, Stanford University School of Medicine) を囲んでのワークショップ。2.第4回注意研究会。話題提供:William Newsome、タイトル:「Linking action to reward: multi-electrode array recordings from



シンポジウム「遠野物語と古典 物語の発生する場所とところ」(11月23日)
左から鎌田東二教授、山折哲雄先生、河合俊雄教授、川村邦光先生

prefrontal cortex”。

●11月28日、第31回こころの未来セミナー「死別を悲しむ心のケア」を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。トーマス・アティグ先生(ボウリング・グリーン州立大学名誉教授・哲学博士)「喪失体験のケア」、エリザベス・デイヴィス先生(ビクトリア大学看護学教授・看護博士)「子供の悲嘆をどう対応できるか」。

●11月30日、吉川左紀子教授が執筆した本が出版されました。京都文化会議記念出版編集委員会・川添信介・高橋康夫・吉澤健吉編『こころの謎kokoroの未来』京都大学学術出版会。

●12月5～6日、こころの未来研究センター連携プロジェクト内部報告会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館中会議室)。

●12月1日、鎌田東二教授の著作が出版されました。鎌田東二編著『モノ学の冒険』創元社。

●12月13日、京都府/京都大学こころの未来研究センター共同企画「こころ」を考える高校生フォーラムを開催しました(於:京都大学芝蘭会館

稲盛ホール)。テーマは「イキモノはつくれるか?」、講師:富田直秀先生(京都大学工学研究科)、司会:吉川左紀子教授、対談:府立高校5校の企画協力委員(12名)。

●12月18～20日、こころの科学特別レクチャーを開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。テーマは、「こころの謎:文化、社会、感情、脳の密接な関係」、講師:北山忍先生(ミシガン大学心理学部教授文化・認識プログラム所長)、亀田達也先生(北海道大学大学院文学研究科教授)、渡邊克巳先生(東京大学先端科学技術研究センター准教授)。

●12月24日、第5回注意研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。話題提供:大嶋義実先生(京都市立芸術大学音楽学部管・打楽専攻准教授)、タイトル:不屈しないクラシック音楽の聴き方。

●2010年1月14日、第32回こころの未来セミナーを開催しました(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。トニー・ホープ先生(オックスフォード大学医療倫理学教授、精神科医)「医者とは患者とどう接したら良いのか～拒食症患者の精神能力と自己決定への対

話」。

●科研「モノ学の構築」モノ学・感覚価値研究会国際シンポジウム(こころの未来研究センター後援)が開催されました(於:京都大学稲盛財団記念館)。芸術部会:2010年1月16日、宗教部会:2010年1月23日、科学部会:2010年1月30日。

●1月17日、京都府・京都大学こころの未来研究センター共同企画、第6回こころの広場を開催しました(於:京都文化博物館別館ホール)。山鳥重先生(神戸学院大学人文学部教授・神経心理学)「こころの仕組み——知・情・意の世界」。

●1月21日、2009年度「京大生の思い」アンケート結果をアップしました。

●1月30日、吉川左紀子教授の編著が出版されました。船橋新太郎教授、平石界助教、長岡千賀学振特別研究員も執筆しています。乾敏郎・吉川左紀子・川口潤編『よくわかる認知科学』ミネルヴァ書房。

●内田由紀子助教の論文が公刊されました。Uchida, Y., Townsend, S.S.M., Markus, H. R., & Bergsieker, H. B. (2009). Emotions as Within or Between People? Cultural Variation in Lay Theories of Emotion Expression and Inference. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 1427-1439. Uchida, Y., & Kitayama, S. (2009). Happiness and unhappiness in east and west: Themes and variations. *Emotion*, 9, 441-456.

●2月7日、河合俊雄教授がNHKラジオ第二放送「文化講演会」に出演しました。

●2月17日、第6回注意研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。話題提供:福士珠美先生(独立行政法人科学技術振興機構研究開発戦略センターフェロ

一)「脳神経倫理の多様性と可能性」。

●2月26日、こころ学ブログに記事をアップしました。「『男らしさ』とは何か?:テストステロン出世仮説」。池田功毅氏。

●2月20～21日、こころの未来研究センター研究報告会(2007-2009年)を開催しました(於:芝蘭会館稲盛ホール、山内ホール)。

●2月25日、平石界助教の執筆した本が出版されました。柏木恵子編著『よくわかる家族心理学』ミネルヴァ書房。

●2月25日、こころの未来研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階小会議室)。河合徳枝先生(国際科学振興財団主任研究員)「バリ島の感性脳科学～ものところとを架橋し合理的に制御する伝統智」、八木玲子先生(国際科学振興財団専任研究員)「感性脳科学から観るバリ人の活性構築」。

●3月4日、こころ学ブログに記事をアップしました。「チンパンジーが教えてくれること」田村亮氏。

●近藤恵研究員の著作と論文が出版されました。『関係発達論から捉える死』風間書房。近藤恵「生の質に迫るとは」『質的心理学研究』第9号。

●3月7日、日本ユング学会で「暴力の由来」シンポジウムが開かれ(於:京都アスニー4階ホール)、河合俊雄教授がパネリストをつとめました。

●3月10日、内田由紀子助教の執筆した本が出版されました。西村健監修、藤本修・白樫三四郎・高橋依子編『メンタルヘルスへのアプローチ:臨床心理学、社会心理学、精神医学を融合して』ナカニシヤ出版。

●3月11～14日、インドネシア共和国ウブドゥ村において、国際ワークショップ「自然と文化とこころ:バリの伝統智との連関を求めて」と、癒し空間プロジェクトのフィールドワ



こころの未来研究センター研究報告会(2月20～21日)

ークの一環として現地の幼稚園、小学校の視察、伝統楽器ガムラン実習等を行いました。

●3月13日、「第5回京都大学附置研究所・センターシンポジウム 京都からの提言 21世紀の日本を考える」が開かれ(於:アクロス福岡)、カール・ベッカー教授が講演しました。

●3月14日、連携研究プロジェクト「依存症に関わる総合的研究」シンポジウムを開催しました(於:京都大学百周年時計台記念館2階国際交流ホール)。テーマは「依存学とはじめ——はまる人生、はまり過ぎない人生、人生の楽しみ方」。

●3月16日、第7回注意研究会を開催しました(於:京都大学大学院人間・環境学研究科講義室B23B)。話題提供:谷淵育夫先生(滋賀医科大学統合生理学教室)「サル黒質—視床—前頭野投射の同定および認知機能」。

●3月25日、畑中千紘研究員の論文が公刊されました。畑中千紘「語りの『聴き方』からみた聴き手の関与」『質的心理学研究』第9号。

●3月7日付け日本農業新聞全国版の一面に、連携プロジェクト「ソーシ

ャル・ネットワークの機能:グループ内の『思いやり』の性質」での調査結果が掲載されました。また、3月17日、内田由紀子助教によるプロジェクトの成果報告が近畿農政局にて行われました。

●大石高典研究員が執筆した本が出版されました。木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌アフリカ熱帯林の人・自然・歴史II』京都大学学術出版会。大石研究員は「森の『パカンス』——カメルーン東南部熱帯雨林の農耕民バクウェレによる漁撈実践を事例に」というテーマで執筆しています。

●3月24日、「わく・湧く・ワーク ショップ～イメージワークとメディテーションの夕べ」が開催されました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。講師はカール・ベッカー教授ほか。

●3月31日、こころ学ブログに記事をアップしました。「譲り合いのまなざし」平石界助教。